

タイにおける環境教育（その1）

カリキュラム開発・社会科教育専修 野元世紀

1 はじめに

2009年9月22日から10月1日にかけて、タイにおける環境教育の実態を調査した。本稿はその報告である。今回訪問したのは、バンコク市にあるタイ教育省・基礎教育部、カセサート大学 Laboratory School（岐阜大学の附属小・中学校に対応）、政府が運営する Rajavitbangkhen School、カセサート大学大学院（College of Environment）である。

タイは極端な一極集中の国家で、人口も国の機能もバンコクに集中している。当然、バンコクと地方では直面する地域的な環境問題は異なるであろう。また、多民族国家のタイでは、地方によって民族の構成も大きく異なっている。例えば北タイでは、ラオスの主要民族であるラオ人の比率が高く、さらに山岳少数民族も多数居住している。民族による環境の認識も異なると思われる。今後、地方の学校における環境教育の実態調査も行う予定である。また、タイ教育省では、教育カリキュラムや環境教育に関する多数の資料を入手した。現在、タイ人留学生が日本語に翻訳中である。内容の分析結果は続報で順次述べていきたい。

2 タイ教育省での聞き取り

- タイ教育省は日本の文部科学省にあたる。基礎教育部の環境教育担当者から環境教育について話を伺った。
- ・12年前から特に環境教育には力を入れている。
 - ・小学校から高校までカリキュラムの中に環境教育に関するものを含んでいる。
 - ・各学校では種々の環境プロジェクトを独自に立ち上げ、教師・生徒・父兄でそれを実践している。
 - ・問題点は、タイの北部、北東部、中部、東部、南部で文化が異なり、考え方も違う。そのため環境プロジェクトに対する意識も多様であり、必ずしも成功しているわけではない。

などの情報を得た。タイでは予想よりもはるかに環境教育に対して力を入れていることが判明した。環境教育の目的は何かと質問したところ、「green and happy society を作る、そして維持すること」という答えであった。

1961年にはタイの国土の57%が森林に覆われていた。しかしその後、森林は急激に減少し、1998年にはその割合は25%にまで落ち込んでいる。その様な中でも、北タイは高い森林面積率を保持している。ただし、北タイの北東部、ラオスとの国境近くでは過去30年間で、森林は半減している。ここはほとんど山岳少数民族の居住が見られない地域である。一方、北タイの北西部、ミャンマーとの国境近くでは現在でも高い森林面積率を保持している。メーホンソン県では森林面積率は80%に達している。また、ここは山岳少数民族が最も多く居住する地域でもある（Nomoto, 2003；川瀬・野元, 2009）。そこで、「山地民の森の文化をどのように評価し、それを環境教育に活かしているか」と尋ねたところ、明確な回答を得ることはできなかった。タイ政府は山岳少数民族のタイ化を進めており、タイ式の教育の普及も図っている。筆者の質問は意外であったのかもしれない。



写真1 タイ教育省基礎教育部入り口

2 カセサート大学 Laboratory School における環境教育の実践

Laboratory School とはカセサート大学の附属学校のことで、小学校から高等学校までである。校舎は大学の敷地内にあるが、新型インフルエンザの影響で、校舎に入るときには赤外線放射温度計による皮膚温度の検査を受けた。環境教育は小学校から高校まで行われていた。

(1) 小学校

小学校では主に理科の授業で環境教育を行う。1年生から始め、ゴミについて勉強する。3年生では川の観察から汚染の実態を知る。4年生では海（パタヤ近く）の生物の勉強。5年生では環境の法律も学ぶ。6年生ではエネルギーの勉強を通して環境を学習する。たとえば、電気の使用量をもとに、使用量を抑える工夫を考える。環境教育の授業は週4コマである。なお、一般の公立学校では週2コマだそうである。また、8月12日の王妃の日には8時から16時まで環境に関する行事を行う。午前中はゴミの分別活動、地球温暖化の体験（テントを張り、高温を体験）、学校の環境を良くするための話し合いを行う。午後は、ゴミから製品を作る活動（たとえば、捨てられた瓶を花瓶にする）。地球温暖化の劇を創作し、演じる（10分間の劇）。この劇には親も出演する。



写真2 小学生の環境活動。捨てられた瓶を花瓶に工作

(2) 中学校

中学校では主に社会科の授業で環境教育を行う。環境問題の実態を知る授業で、高校ではその原因を考えていく。授業では各自が環境に関するポスターを作り、そのポスターを使ってクラスで説明を行う。年2回、環境教育の遠足を実施する。そのうち1回は必ず行き先はお寺である。その理由は、僧の生き方は環境を守る生き方であるのでそれを実感させるためである。また、環境に関するニュースを集め、皆でその問題を考える。地球の未来を考えさせることも授業で行う。

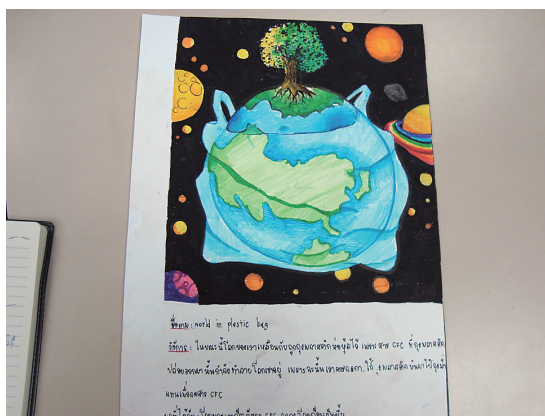


写真3 中学生が作成した環境ポスター

(3) 高等学校

高校では選択の授業として「環境」がある。授業の内容は、環境悪化の原因や代替エネルギー、環境保護などが中心である。また、セミナー形式で授業を行うこともあり、生徒たちの考えを発表させている。教師がCD版の環境に関する教材を多数作成している。教材の中身は、自然の理解(生態系の理解)、世界に起こっている環境問題などである。特に海の生態系を詳しく勉強させる教材ができています。また、授業中に生徒たちは環境グッズを作成したり、環境保護を訴える音楽を作曲・演奏し、それをCDに収録したりしている。環境絵本を作成する学生もいる。各自環境シートを作成し、環境に対する貢献を自己評価している。毎年、5-6名の生徒が海外に短期留学をして、その国の温暖化対策について勉強し、帰国後、皆の前で発表することも行っている。なお、「環境」の授業は週2コマである。教師たちの環境に関する国際交流もさかんで、数年前には広島県を訪れ、そこの教師たちと環境問題について意見交換を行った。また、インターネットを通じて常に海外と環境問題について意見交換を行っている。

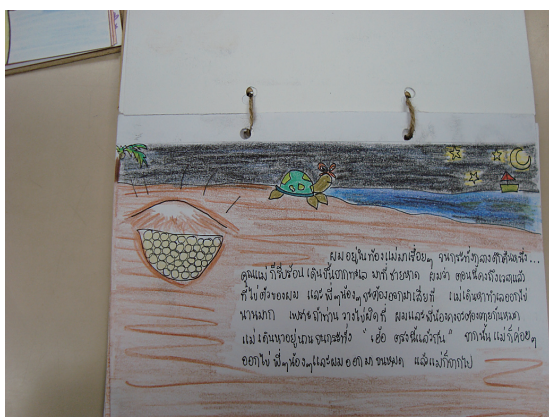


写真4：高校生が制作した環境絵本（左）と環境グッズ（右）

4 Rajavitbangkhen School のキャンパスと環境教育

バンコクにある政府が運営する小学校から大学まで一貫教育の学校である。カセサート大学 Laboratory School 同様、環境教育には力を入れている。カリキュラムの内容もカセサート大学とほぼ同じである。この学校で驚いたことは、キャンパス内が自然観察園のようになっていることである。多数の木本・草本の植物が植えられていて、それぞれの植物には名札がつけられ、ラテン語の学名も書かれていた。植物の世話を生徒が行うことで、植物の名前を覚えるだけでなく、その生態も理解するという話であった。小さな湿地もキャンパス内に作られ、そこにはマングローブが生えていた。汚水を流した水路もあり、植物による水質の浄化を観察することができる。また、校舎内には大型の水槽が2つあり、そこにはタイに生息する淡水魚が泳いでいた。同行したカセサート大学のスタッフも、この学園の環境に関する設備の充実さには驚いていた。



写真5 自然観察園のようなキャンパスで
学園のスタッフと記念撮影

5 おわりに

この他、カセサート大学大学院、College of Environment や、バンコクから南に100km 離れたところにある College of Environment の環境改善実験所も訪問した。College of Environment は大学院ではあるが、企業としての性格も持ち、種々のプロジェクトを企画し予算を得ている。40名の院生たちは、いくつかのプロジェクトに関わり、実務的な体験を通して、研究活動を行っていた。

今回訪問したカセサート大学附属学校や Rajavitbangkhen School はきわめて教育環境が整った学校であった。一般の公立学校についても環境教育の実態について調べる必要がある。調査を通して感じたことは、学園内では立派な環境教育が行われているが、それがまだ家庭や社会に広がっていないことである。人が集まると、解散後にはゴミの山ができていく。バンコクでは雨季に入ると、しばしば排水溝の水が溢れ、水害が発生する。排水溝が詰まる最大の原因は、買い物時に出るビニール袋が路上に投棄されることによる。教育省で、タイの環境教育についての意見を求められた際、環境教育が社会に広がっていない現状を解決する必要があると答えた。

タイの環境教育はおそらく欧米のどこかの国の環境教育を手本にしているものと思われる。学年の進行とともに、地球温暖化や世界の環境問題に目を向けている。グローバルな視点をもつことは良いことではあるが、身近な環境問題を徹底的に見つめることも必要であると思う。また、タイにはもともと持続可能な社会を構築する文化があった。自然との共存を基本にしたこれらの文化を再評価し、環境教育はそれを基本とするような、すなわちタイ式環境教育も重要であると考えられる。入手した資料の分析結果は続報で報告する。

本研究を遂行するにあたり、経費の一部に交流協定大学との研究者交流助成金を用いた。調査には、カセサート大学農学部サヤン教授、および彼の研究室の院生にお世話になった。また、教育省基礎教育部、カセ

サート大学附属学校、Rajavitbangkhen School、カセサート大学大学院 College of Environment のスタッフの方々にも貴重な時間を割いていただいた。ここに記して感謝する次第である。

参考文献

- 川瀬祐介・野元世紀 (2009) : 北タイ、メーホンソン県における山地民と森林との関わりに関する研究、岐阜大学教育学部研究報告 人文科学、58 (1)、29-46
- Nomoto, S. (2003) : Decreases in the number of foggy days in Thailand and Japan, and possible causes, Journal of International Economic Studies, 17, 13-28

